



中学校音楽科における能の授業(1) :
「能って何？」への理解を深める授業実践の可能性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中西, 紗織, 齊藤, 貴文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007044

中学校音楽科における能の授業(1)

—「能って何？」への理解を深める授業実践の可能性—

中西 紗織・齊藤 貴文*

北海道教育大学釧路校音楽教育実践分野

*北海道教育大学附属釧路義務教育学校（後期課程）

Teaching Noh in Junior High School Music Class(1)

— Exploring the Possibility of Classroom Practice for Better Understanding of “What Is Noh ?” —

NAKANISHI Saori and SAITO Takafumi*

Department of Music Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

*Kushiro Compulsory Education School (Lower Secondary Level) of Hokkaido University of Education

概 要

本研究の目的は次の三点を明らかにすることである。第一に、中学校音楽科の授業で能をどのように取り上げれば生徒たちが西洋音楽とは異なる能の音楽理論に基づく表現の特徴に気づき自分だけの表現に活かすことができるようになるかということ、第二に、能をどのように取り上げれば生徒たちが能の演劇的特徴やよさを自ら発見し能への理解を深めることができるかということ、そして第三に、能を取り上げる際、どのような授業内容・方法・目標によることが音楽文化の理解と継承のために有効であるかということである。以上三点を明らかにすることは、よりよい能の授業づくりを導くだけでなく、教員養成課程の学生のための能の授業にもつながり、それが学校教育の場にどのように接続するかを展望することにもなるだろう。本稿では、中学校音楽科における能の授業実践から、生徒が自ら能の演劇的特徴や能の音楽の面白さや多様性に気づき理解を一層深めたプロセスを検討し、よりよい授業づくりへの指針を得た。

はじめに

本研究の目的は次の三点を明らかにすることである。第一に、中学校音楽科の授業で能をどのように取り上げれば生徒たちが西洋音楽とは異なる能の音楽理論に基づく表現の特徴に気づき自分だけの表現に活かすことができるようになるかということ、第二に、中学校音楽科の授業で能をどのように取り上げれば生徒た

ちが能の演劇的特徴やよさを自ら発見し能への理解を深めることができるかということ、そして第三に、中学校音楽科の授業で能を取り上げる際、どのような授業内容・方法・目標によることが音楽文化の理解と継承のために有効であるかということである。以上三点を明らかにすることは、中学校音楽科におけるよりよい能の授業づくりを導くだけでなく、教員養成課程の学生を対象とした能の授業にもつながり、そのことがまた学校教育の場にどのように接続していくかを展望することにもなるだろう。そのような視野も持ちつつ、先行研究や授業実践を検討し、実際の授業実践を分析しつつ論を進める。本研究は、(1)「能って何?」「能の音楽とは?」「音楽の多様性」への理解を深める授業実践の可能性と、(2)音楽文化の理解と継承を目指した授業実践の可能性の二編にわたる内容を予定している。今回は主に(1)と、冒頭にあげた第一、第二の目的に関して論じる。なお、はじめに、1, 2, 4-1, おわりにを中西, 3, 4を齊藤が執筆した。

平成10年告示の中学校音楽科学習指導要領で必修化されて以降、現行の学習指導要領においても引き続き、第1学年から第3学年までに一種類以上の和楽器を扱うことが記されている。平成29年告示の最新の中学校学習指導要領音楽編には、「我が国や郷土の伝統音楽に関わる指導の充実」が強調されている¹⁾。ここではまた、「愛着をもつことができるよう工夫すること」という文言が新たに示されている。加えて、和楽器の学習において「適宜、口唱歌を用いること」が新たに示され、日本伝統音楽本来の方法に則った学習がさらに重視されてきていることがわかる(文部科学省 2018b, p.111, pp.113-114)。

これまでに筆者は、10年以上にわたって教員養成課程の学生を対象に能の授業を行い、学習プログラム・モデル(中西 2008, 2015bなど)の再構築を続けており、声と身体に焦点をあてた体験学習が効果的であることを確認してきた。学生たちは、身体を通してわかったり身体に染み込むように習得したりすることへの興味を深めていく。学生の学びが、彼らが教員となった時に子どもたちに文化としての能の価値やよさを伝えることへ接続していくことの重要性を筆者は再確認した。能を学習した学生たちは、自国の伝統音楽や伝統文化の美とその奥深さに深い愛着や畏敬の念を抱くだけでなく、次世代への文化継承の意識を高めていくのである。本研究では、中学校音楽科の授業実践から、冒頭に示した目的を明らかにすることを試みる。

1. 先行研究について

学校教育において「日本音楽を学ぶ意義」について、本多は「自国の音楽文化のよさを理解し、味わうことから、ひいては、他国の音楽文化の理解にもつながり、多様な価値観を認めあう姿勢を育むことにもつながると考える」(本多 2020, p.2)と述べている。さらに、音楽科学習指導要領では、音楽科の目標に関して音楽文化の継承や創造の重要性が説明されている²⁾。

中学校における能の授業実践について、以下三例をあげる。長坂(2005)は、出会う・創造する・伝えるというプロセスによって授業を構成している。能楽堂で授業を行い、生徒は能楽師から能舞台で指導を受け、能舞台で謡と仕舞を発表しその映像の見直しと振り返りを通して学びをさらに深める。生徒が自文化としての能の価値やよさに気づき伝えたいという気持ちを自然と高めていったという成果や意義が報告されている。

伊野・相馬(2014)は、能・長唄・文楽を取り上げ、各種目のプロフェッショナルなゲストティーチャーによる実演鑑賞と実技体験を通して、生徒が類似点や相違点に気づきそれぞれの音楽の特徴をつかんでいく系統的学習の意義について述べている。

玉村・荻野は、中学校での能《羽衣》の授業実践から、学校教育における能の授業の指針を示している。体験から入ることで、謡と舞、物語と音楽的・身体的表現との関わりへの理解が深まり、比較の視点から鑑賞活動が有意義になったという成果が示されている。注目すべきは、同じ能の中の比較、つまりクセとキリの比較によって明確に見える違いを生徒が発見している点である。玉村は、学校や子どもたちの現状から遊離しない授業のあり方を提示し、小島の「生成の原理」を引いて、子どもたちの「外部世界と内部世界」

(小島 2015b, p.8)に能に関する新たな世界が生成されることを展望している(玉村・荻野 2017, p.653)。

また、高等学校における例として、岡本(2018)は、世界の多様な発声法と日本の発声法を比較して取り上げ、日本の伝統音楽の歌唱指導を取り上げている。その中で「長唄や能の謡、義太夫節などの音声は、日本語の響きやアクセント等の特徴と大きな関連性を持ち、その音声・音韻の固有で独自の美的音感覚として成立している」と述べている。

能の謡は、物語に即して音楽と言葉が結びついた固有の美意識の上に成り立っており、能という演劇を進めていく重要な役割を果たすだけでなく、身体表現としての舞とも深く結びついている。能の謡を学ぶことは、日本語独自の声の表現とともに声の多様性や能の演劇的特徴への理解にもつながるだろう。

教員養成大学における能の学習の実践的効果については垣内(1987)、尾藤(2008など)らの研究がある。垣内は、小学校教員志望の学生たちの将来の授業に結びつくような構想を立て、能を題材とした授業を行っている。そこでは、能楽師による謡・仕舞・小鼓の実技があり、能独特のリズム構造も教授されている。学生自身が能入門の小冊子、扇、能面を作成したことにも注目したい。このような学習活動は、能への理解を深めるだけでなく、将来彼らが教えることへ継続していく貴重な活動である。(垣内 1987, pp.144-153)

尾藤は、教員志望の音楽専攻の大学生を対象に、大学教員と能楽師による能の指導に関する分析を行い、学生が謡曲の基礎や表現への理解を深めたという成果を示している。学生が技術的なことを習得しつつ、文化としての謡曲の価値を認め、それを子どもたちに伝えたいという意欲を高めている。プロの能楽師の指導後、学生は「基礎技術の聞き取りも、細かい点まで違いがわかるようになり、謡曲の繊細さ、表現技術の奥深さを一層実感でき」、子どもに「日本の文化のよさや立ち振る舞いの特徴など文化的側面についても伝えたい」と記述した(尾藤 2008, pp.59-73)。

いずれの研究においても、近い将来指導する立場となる学生が、体験を通して能を学習することで「教える・学ぶ」の連関への意識を自ら高め、何をどのように教えるかという問いへの答えを導き出そうとしている。このことは、子どもたちを対象とした授業づくりへの貴重な示唆を含んでいる。

2. 能について

能の歴史、舞台空間、演劇的特徴、世阿弥の稽古哲学などについて詳しくは、表・天野(1987)、横道(1987)、西平(2009)などを参照されたい。本稿では、授業に関わることについて簡単に上げたい。

2-1 能って何？

ここでは五つの特徴をあげてみる。もちろん能の特徴はこれらに限ったものではないが、学校教育で取り上げる際に、①音楽劇であるという特徴(だからこそ音楽科の教材として取り扱われることが多い)、②700年近い歴史を持つという歴史的側面と重要人物、③舞台空間の特殊性、④視覚的に認識しやすい演出的特徴、⑤人類の文化遺産であるという価値を持つこと、以上五点の切り口から能について語り始めることは重要であると考えられる。

- 謡(うたい)・舞(まい)・囃子(はやし)が重要な役割を果たす音楽劇
- 観阿弥(1333~1384)と世阿弥(c.1363~c.1443)親子によって室町時代に大成された
- 左右非対称の特別な舞台で演じられる
- シテは面(おもて)をかけて演じる
- ユネスコの無形文化遺産に登録されている

2-2 能の音楽

能の「音楽」だけに注目するならば、謡という声楽と、囃子という楽器の演奏が能の音楽であるという説明の仕方ができよう。しかしながら、「能において純粹に音楽的な要素だけを取り出すことは難しく、(中略)

能の音楽を考えるとということは、その音楽が不可分に舞踊と演劇と融合していることを改めて知る作業であるかもしれない」(三浦 1998, pp.1-2)と三浦は述べている。能は現代の私たちにも通じる人間ドラマであるという認識を持つことで、能の魅力をさらに豊かに深く確認することができるかもしれない。音楽科の授業において音楽の要素や仕組みなどにも注目しつつ、演劇としての能のよさを生徒たちがそれぞれの捉え方で発見するプロセスは能の学習において非常に重要である。

2-3 能の稽古

能の稽古は、師匠のやることなすことを弟子がひたすら模倣し、年月をかけ身体を通してわかるようになっていくプロセスである。稽古では、謡の場合は一対一で師匠と弟子が対面し、「鸚鵡返し」の方法によって、初心者の場合は一節ずつ区切り師匠が謡い、弟子がそれを真似て謡うという方法をとる。慣れてくると区切りが長くなっていく。舞の場合は、やはり一対一で、師匠が隣で謡いながら舞うその動きを、弟子はなぞるように模倣しながら記憶していく。ある程度慣れてくると一人で舞うことになる。ここで重要なのは、ひたすら模倣することである。生田は伝統芸道における稽古のプロセスを、「模倣一繰り返し……習熟」と図式化し(生田 2007, p.18),「学習者がなすことはただ模倣と繰り返しの連続」であると述べ、模倣の重要性について説いている(同 pp.9-21)。授業における模倣による謡の学習(鸚鵡返しによる謡の体験)については、後述する。

3. 中学校における能の授業

令和3年1月26日中教審答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』では、社会の在り方が劇的に変わる予測困難な時代を生きぬく子どもたちにとって必要な資質・能力を育む「令和の日本型学校教育」の姿として平成29年告示の学習指導要領の着実な実施とICTを積極的に使うことを前提とした、個別最適な学びと協働的な学びの充実が挙げられ、今後の音楽科教育においても念頭に置いて授業を設計していく必要がある。

今回題材となる「能」はこれまでの知見から、本校生徒にとって非常に遠い存在の音楽の一つである。北海道には伝統音楽としての「能」を身近に感じる施設が無いことや、現在子どもたちが触れている音楽との違いが大きいことなどから積極的に「能」について触れる経験があまりに少ないからと考えられる。しかし、我が国の伝統音楽の一つ「能」は世界的に見るとユネスコの無形文化遺産にも登録された非常に価値の高い日本の伝統的な音楽の一つであるとともに、日本人以上に海外の方からも高い評価を受けている実態がある。西洋の音楽とは異なる音楽理論から生まれた芸術が、およそ700年前から形を変えずに受け継がれているその「能」にある、私達日本人が受け継ぐべき価値や魅力に触れ、味わうことは義務教育の段階において非常に重要であるのではないかと考えた。

そこで、第3学年(授業時の学年)のために次のように題材名と題材の目標を設定した。

第3学年

「Noh ～世界に誇る日本文化の価値を探ろう」

・題材の目標

- (1) 我が国の伝統音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性について理解して聴いている。【知識】
- (2) 音色, リズム, 速度, 旋律を知覚し, それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら, 知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに, 音楽表現の曲想と音楽の構造との関わりについて考え, 音楽のよさや美しさを味わって聴いている。【思考・判断・表現】
- (3) 鑑賞の学習やリーフレットを制作する学習を通して, 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史, 他の芸術との関わりなどに関心を持ち, 音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組んでいる。【主体的に学習に取り組む態度】

3-1 計画

題材の目標を達成するために今回は使用する中心題材を《船弁慶》とした。2019年度から教材研究を深めている《船弁慶》はストーリーがわかりやすく、取り上げる後半部分については音楽の盛り上がりなど生徒にとって捉えやすい部分が多い。また、使用する映像資料も扱いやすいものがあることから、今回の中心題材とした。しかし、これまでの経験上、いくら捉えやすい題材だからといっていきなり鑑賞をさせると理解が深まらず、十分な鑑賞に至らない生徒も一部にすることが考えられる。また、今回の題材で目指すのは、《船弁慶》のよさを見出すことはもちろんだが、それだけではなく、学習計画全体を通して「能」のよさや魅力を捉え、発信することを目指している。

そこで、学習の大まかな計画を次のとおりStep1からStep4に設定し、鑑賞の理解を深めるとともに、学びを生かしてアウトプットすることを計画した。

Step 1 能全体の概観を捉える→Step 2 能の謡を体験する→Step 3 鑑賞→Step 4 リーフレットづくり

その詳細と評価規準は以下の通りとなっている。

時間	学習内容	評価規準		
		知識	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	○能の音楽との出会い ・歴史や楽器、面についてなど	↓	↓	↓
2	○能のうたってどんうた？ ・謡について ・謡の体験	↓	↓	↓
3	○《船弁慶》の魅力 ・《船弁慶》の後半視聴 ・謡、楽器の特徴を考える	船弁慶の特徴とその特徴から生まれる音楽の多様性について理解している。	音色、リズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととのかかわりについて考えるとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え音楽のよさや美しさを味わって聞いている。	↓
4	○能の魅力を詰め込んだリーフレットづくり ・外国の人や初めて能に触れる人たちのためにリーフレットをつくる	我が国の伝統音楽の特徴とその特徴から生まれる音楽の多様性について理解している。	我が国の伝統音楽のよさや美しさとはどこにあるのかその魅力について考え、リーフレットに表現している。	鑑賞の学習やリーフレットを作成する学習を通して、音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術とのかかわりなどに興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

このように計画することによって、これまで遠い存在であった能について関心を高めるとともに、能のよさや魅力について捉え、日本文化として受け継ぐ必要性や世界に向けて発信することの大切さに気づいてほしいと考えた。

4. 授業実践

本稿では、冒頭で述べた「能の音楽とは？」と「音楽の多様性への理解」に焦点を絞り、1～3時間目の授業実践を取り上げ、その結果について考察する。

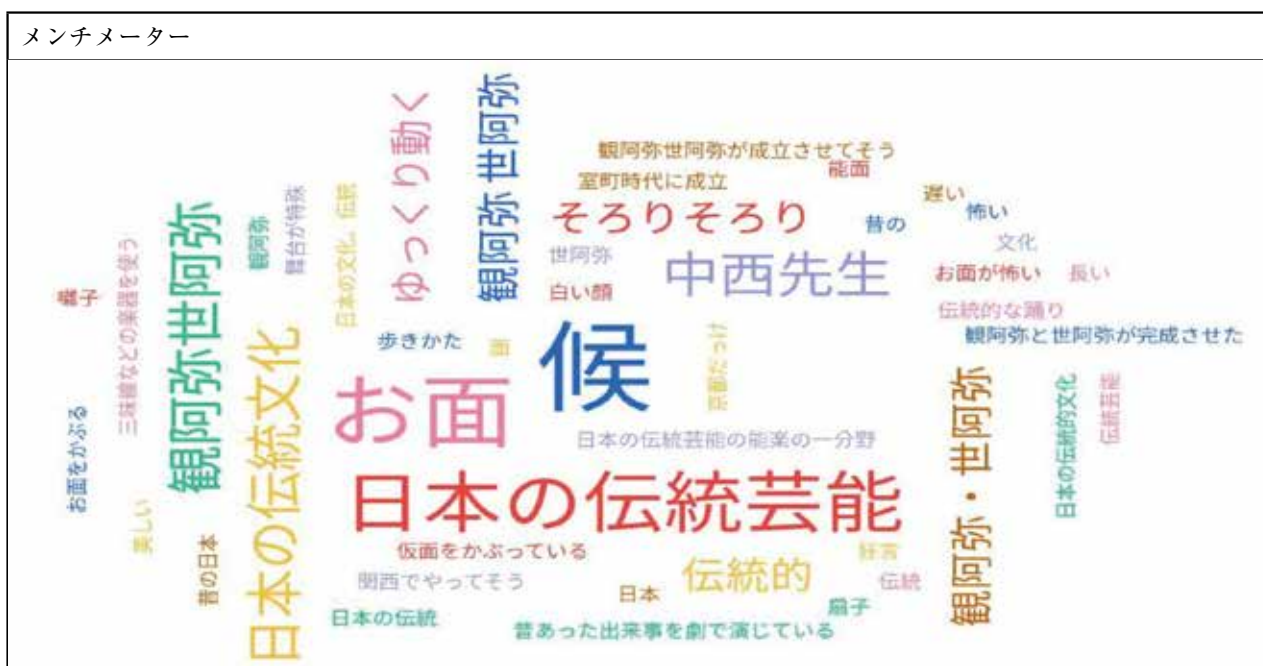
1～3時間目の使用映像教材



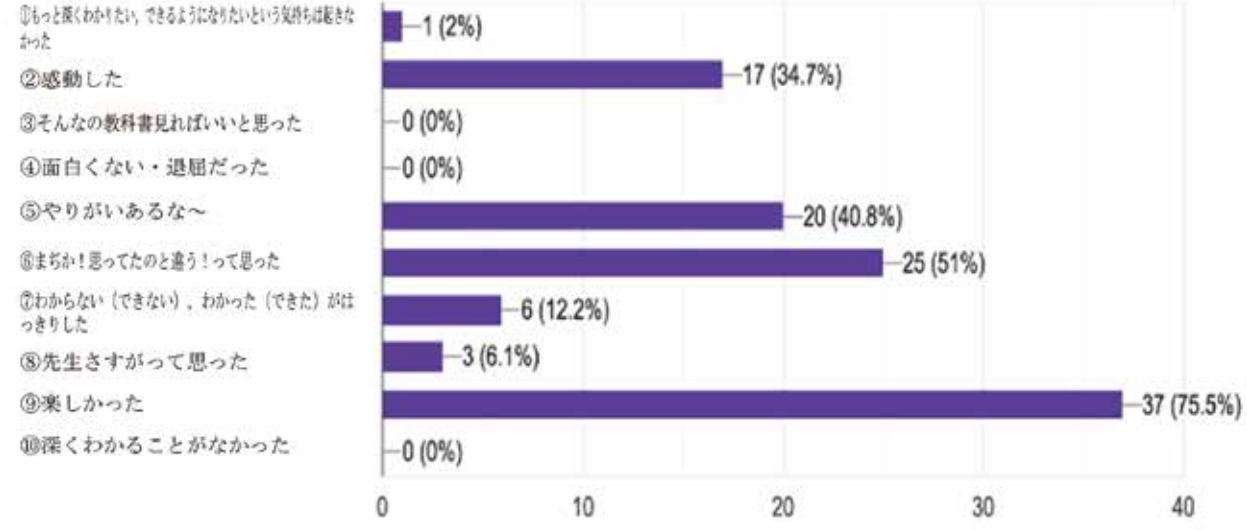
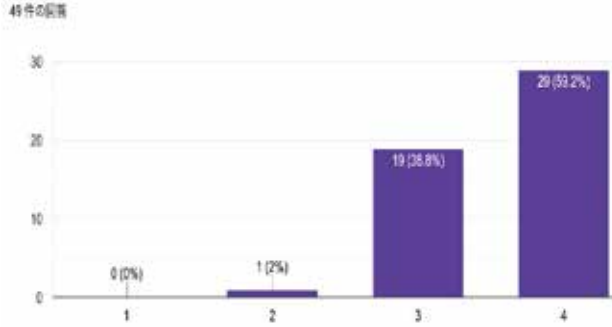
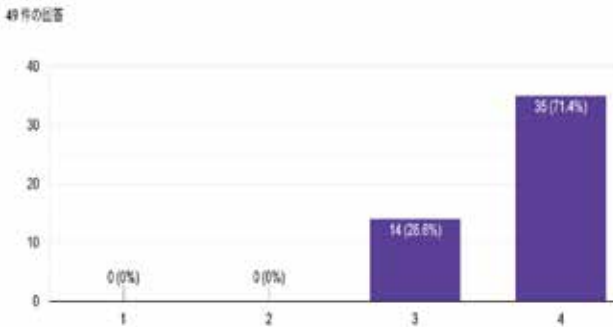
- 能 船弁慶～後半～（字幕・解説付）(https://www.youtube.com/watch?v=zUjHwFOXluc)
- 能を楽しむための基礎知識❖日本の伝統芸能【日本通tv】(https://www.youtube.com/watch?v=RNE60ygYH6E)
- 能楽を楽しむvol. 1 「能と狂言の違い」(https://www.youtube.com/watch?v=Qjlg9ov34Y4)
- 能楽を楽しむvol. 2 「能面の裏側に迫る！」(https://www.youtube.com/watch?v=cwPCAzLneGw)
- 能楽講座①「初級編」 お能を楽しむ〈構成・ストーリー〉(https://www.youtube.com/watch?v=T1dy-soCoAM)
- 能楽囃子の楽器紹介 (https://www.youtube.com/watch?v=olyMfAA8TJE)
- 【8分でマスター！】有名な『高砂や～』を謡ってみよう！ (https://www.youtube.com/watch?v=40fk_gmEeCA)

1時間目 目標：能の鑑賞を通して能の音楽の成り立ちや特徴を捉えることができる。

学習活動・生徒の姿	教師の働きかけ	備考
1. 能について知っていることをメンチメーターに入力し、交流する。	○能についてどんなことを知っていますか。 ○音楽についてはどんなことを知っていますか。	*WEBアプリのメンチメーターで能についての経験や知識を確認する。 *「知らない・関心が薄い」から、「知る必要がある」を引き出す。
世界に誇る日本文化の価値を探ろう		
2. 映像を視聴し、能の音楽がどんな音楽か捉え、交流する。 ・語尾が伸びている ・何をやっているかよく分からない	○能の音楽はどんな音楽でしょうか。映像から捉え発表しましょう。 △リズムは何でとっていましたか。 △歌っている人はどこにいましたか。	*能についての全体概要をYou Tubeを使って捉える。 *最初の1時間なので、広く「能」とはどんなものなのかを捉えられるようにし、関心を高めるための方向づけをしていく。
3. 能に関わるいくつかの映像資料から能の特徴を捉える。 ・後見の役割について驚いた ・面の角度によって… ・歌っている人と楽器をやっている人が…	○どんな特徴を捉えましたか。	
4. リフレクションをする。	○1時間を通してどんなことを考えましたか。	

表1 1時間目の授業のメンチメーター・授業の様子・リフレクション



<p>授業の様子 1</p> 	<p>授業の様子 2</p> 																																	
<p>リフレクション 1</p> <p>○学習を終えて当てはまるもの全てにチェック</p>  <table border="1"> <thead> <tr> <th>リフレクション項目</th> <th>人数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①もっと深く知りたい、できるようになりたいという気持ちは起きなかった</td> <td>1</td> <td>2%</td> </tr> <tr> <td>②感動した</td> <td>17</td> <td>34.7%</td> </tr> <tr> <td>③そんなの教科書見れば良かった</td> <td>0</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>④面白くない・退屈だった</td> <td>0</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>⑤やりがいがあるな～</td> <td>20</td> <td>40.8%</td> </tr> <tr> <td>⑥まちか!思ってたのと違う!って思った</td> <td>25</td> <td>51%</td> </tr> <tr> <td>⑦わからない(できない)、わかった(できた)がはっきりした</td> <td>6</td> <td>12.2%</td> </tr> <tr> <td>⑧先生さすがって思った</td> <td>3</td> <td>6.1%</td> </tr> <tr> <td>⑨楽しかった</td> <td>37</td> <td>75.5%</td> </tr> <tr> <td>⑩深くわかることがなかった</td> <td>0</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>		リフレクション項目	人数	割合	①もっと深く知りたい、できるようになりたいという気持ちは起きなかった	1	2%	②感動した	17	34.7%	③そんなの教科書見れば良かった	0	0%	④面白くない・退屈だった	0	0%	⑤やりがいがあるな～	20	40.8%	⑥まちか!思ってたのと違う!って思った	25	51%	⑦わからない(できない)、わかった(できた)がはっきりした	6	12.2%	⑧先生さすがって思った	3	6.1%	⑨楽しかった	37	75.5%	⑩深くわかることがなかった	0	0%
リフレクション項目	人数	割合																																
①もっと深く知りたい、できるようになりたいという気持ちは起きなかった	1	2%																																
②感動した	17	34.7%																																
③そんなの教科書見れば良かった	0	0%																																
④面白くない・退屈だった	0	0%																																
⑤やりがいがあるな～	20	40.8%																																
⑥まちか!思ってたのと違う!って思った	25	51%																																
⑦わからない(できない)、わかった(できた)がはっきりした	6	12.2%																																
⑧先生さすがって思った	3	6.1%																																
⑨楽しかった	37	75.5%																																
⑩深くわかることがなかった	0	0%																																
<p>リフレクション 2</p> <p>49件の回答</p>  <table border="1"> <thead> <tr> <th>評価</th> <th>人数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>0</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>1</td> <td>2%</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>19</td> <td>38.8%</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>29</td> <td>59.2%</td> </tr> </tbody> </table>	評価	人数	割合	1	0	0%	2	1	2%	3	19	38.8%	4	29	59.2%	<p>リフレクション 3</p> <p>49件の回答</p>  <table border="1"> <thead> <tr> <th>評価</th> <th>人数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>0</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>0</td> <td>0%</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>14</td> <td>28.6%</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>35</td> <td>71.4%</td> </tr> </tbody> </table>	評価	人数	割合	1	0	0%	2	0	0%	3	14	28.6%	4	35	71.4%			
評価	人数	割合																																
1	0	0%																																
2	1	2%																																
3	19	38.8%																																
4	29	59.2%																																
評価	人数	割合																																
1	0	0%																																
2	0	0%																																
3	14	28.6%																																
4	35	71.4%																																

今回は学習後にタブレット端末を用い、Googleフォームによるリフレクションを毎時間実施した。上のリフレクション1, 2, 3はその結果を示したものである。リフレクション1は「学習を終えて当てはまるもの」をチェックしたものである。75%以上の生徒が「楽しかった」と回答していることから、本時が子どもたちにとって退屈でつまらないものになることなく、また、次時への意欲をもたせられることにつながる結果となった。また、51%の生徒が「思っているのと違った」を選択しており、本授業を通して学習する目的や必要感を芽生えさせることにもつながったと考えられる。リフレクション2からはほとんどすべての生徒が能の学習に関心を持つことができたことと捉えることができるとともに、リフレクション3からは第1時で目

指したことのひとつである、能とはどのような音楽なのかその外観を捉えることは十分にできたと見ることができる。

生徒からは「以前は面白さを感じる事が出来なかったけど今日いくつかきいてみたら、楽器が太鼓以外にも声や大鼓や小鼓、笛など知っていなかったことが知れた」「能と聞いてあまりよくわからなかったけど、能を実際に見てみて初めよりは少し興味を持ってたと思う」「日本の伝統文化であることは知っていたけれど具体的にどの様な特徴があってどのように構成されているのかなどは全然知らなかったけれど、授業を通して能はできた時からずっと変わらないまま受け継がれているという特徴のあるものだということがわかった」などこれまでは知らなかった、興味を持ってなかったものが1時間を通して変容した声を多く聞くことができた。

2時間目 目標：謡の体験する活動を通して、謡の声の特徴を理解し、既習の歌との違いや謡のよさについて自分なりの考えをもつことができる。

生徒の姿	教師の働きかけ	備考
1. 前時に捉えた能の特徴をメンチメーターに入力し、交流する。	○前回捉えた能の特徴にはどんな特徴がありましたか。 ○能の歌はどんな歌でしたか。	* 声に着目し、既習の発声との違いについて「知らない」を引き出す。
能の歌ってどんな歌？じっくり・繰り返し視聴&体験で特徴を捉えよう！		
2. 映像を視聴し、能の音楽がどんな音楽か捉え、交流する。 ・腹のそこから出している ・クセが強い ・一定の高さ、一定のスピード…	○能の音楽はどんな音楽でしょうか。映像から捉え発表しましょう。 △リズムは何でとっていましたか。 △歌っている人はどこにいましたか。	* 映像を視聴して捉えるからはじめ、実際に声を出してみることで、より一層既習の発声との違いを体感させていく。 * 次時により深い鑑賞ができるように、声の感じはもちろん、謡を担当している人の凄さにも気づかせていく。
3. 映像を視聴しながら体験を通して、謡の特徴を捉え、交流することができる。 ・コブシが難しい… ・重くて響く声を出すのが… ・上がったたり下がったり… ・息が苦しい…	○どんな特徴を捉えましたか。	
4. リフレクションをする。	○1時間を通してどんなことを考えましたか。	

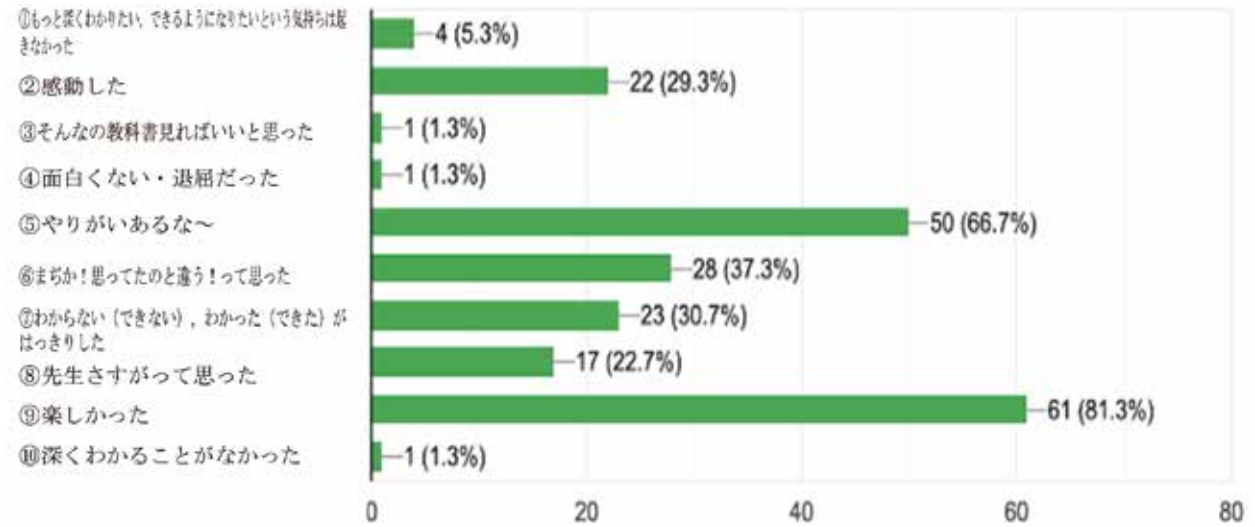
表2 2時間目の授業のメンチメーター・授業の様子・リフレクション

メンチメーター		
日本の伝統的な音楽	悲しきとかマイナスの感情を表現する事が多いミュージカルの様な音楽	昔から受け継がれてきている音楽だと思います。
日本の伝統芸能で、演目によって主役の性別やしゅ	日本を代表する伝統的な音楽、多くの人に親しまれている。	長い間受け継がれてきた伝統的な音楽
掛け声をする人たちと楽器を使って演奏する人たちの二手に分かれています	昔から変化してないまま受け継がれていて、能と狂言の2つを組み合わせて構成されているので何を見ても飽きない工夫がされている。	The日本って感じの笛とか太鼓を使ったあまり選手ではない音楽
日本伝統の演技、音楽などが合わさっている一つの作品芸術などいろいろな種類がある。	ユネスコの無形文化遺産に登録されている。昔からほぼほぼ状態が変わらずに受け継がれている日本伝統文化。狂言や能明がずっと変わらずに一人一人が想像を膨らませながら演技をするのが特徴的で、演奏舞台は、4つの楽器からなっている。	悲しきとかマイナスの感情を表現する事が多いミュージカルの様な音楽
能は能面を使って感情を表現したり、太鼓や笛などの楽器を用いたりして物語を重める音楽	室町時代に成立し、ほとんど形が変わっていない伝統的な音楽	能はリズムが独特であり、様々な楽器を使う。
6世紀から7世紀(室町時代)中国からきて成長してきた600年の歴史がある日本の伝統芸能。照明と音楽が一定であることや出演する人、舞台、楽器の作り、能面の工夫など様々なことが考えられている。一時消滅したりもついでにまた復活したけど今も続いてたぶんの人に愛されている。	日本の伝統芸能で、600年の歴史があり無形文化遺産に登録されている。狂言や音楽が変わらない中で、色々な工夫をしてお客さんに物語を伝える。	600年の歴史があり、舞台には背景は無く、照明は変わらない。



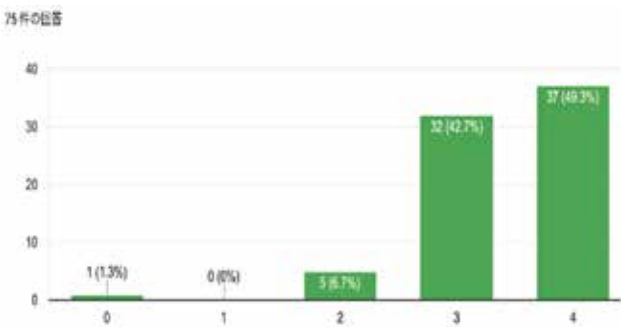
リフレクション 1

○学習を終えて当てはまるもの全てにチェック



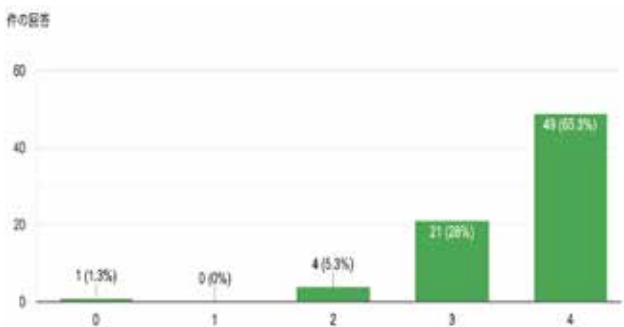
リフレクション 2

○謡の体験を通して声の特徴とその出し方の理解



リフレクション 3

○どのように謡うのかよく考えることができた



リフレクション 1 より81%の生徒が「楽しかった」、70%が「やりがいがある」と感じたことから学習そのものが生徒にとって学びを深める・広げるものとなったことがわかる。特に本時の主要学習の一つである「鸚鵡返しによる謡の体験」は生徒にとって初めての活動であるとともに、中学生という発達段階からすると抵抗を感じる生徒も一定程度いることが想定されたなかでのリフレクションの結果である。当初想定したねらいが、生徒が楽しんで、且つやりがいを感じる中で達成できたことがわかる。リフレクション 2 と 3 からは謡の体験が体験したままにとどまらずその意味や身体の使い方などを多くの生徒が理解したことが認められた。「声の出し方や、伸ばし方などを知ることが出来ました。一定したスピードで一定した重く響く低い声を出すことや、上がったたり下がったりした所などが難しかったです」「声を出すときの姿勢や声の出し



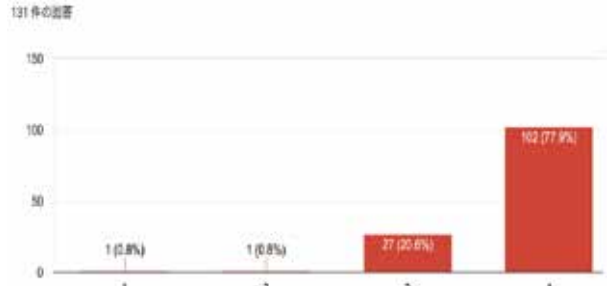

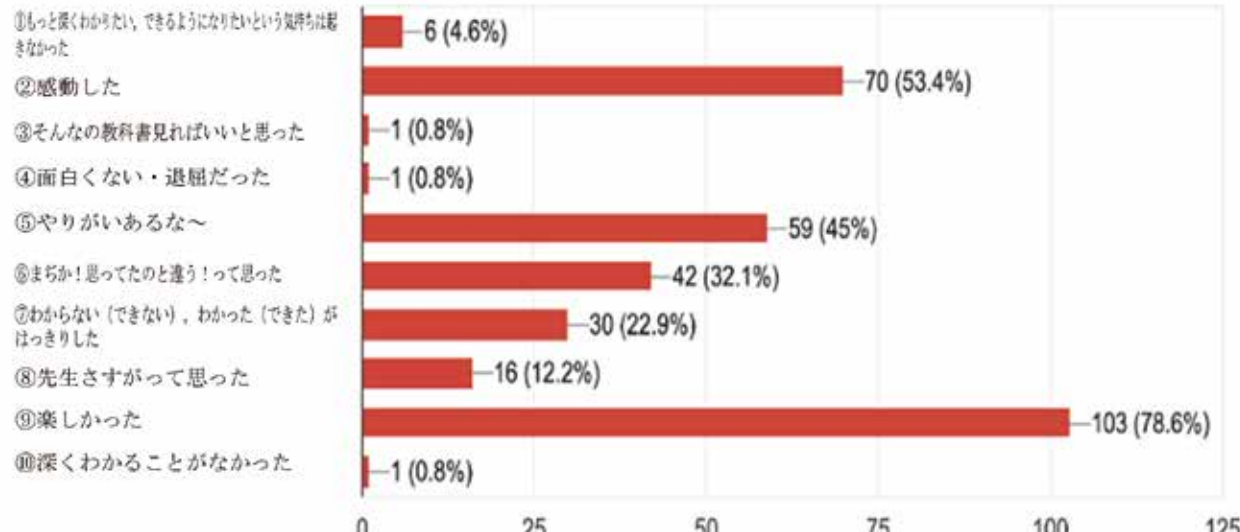
方について動画を見て学び理解することができたとは思いますが、自分で歌ってみると音の上げ下げや音の伸ばすこと、微妙な音の高さの違いを変えて謡うことがとても難しかった」「能での声の出し方、聴こえてくる響きなどは普段聴いているような音楽やオペラとは全く違うものだと思います」など、授業を通して謡の難しさに焦点があたる生徒が多かったが、自分たちが経験してきた発声法との違いに気づくとともに、古来より受け継がれてきた独特の歌唱に関心を高めていた。

3時間目 目標：能《船弁慶》を鑑賞し、音楽の特徴を理解するとともに、音楽表現のよさや魅力を捉え、自分なりの考えをもつことができる。

生徒の姿	教師の働きかけ	備考
1. 前時までに捉えた能の特徴をメンチメーターに入力し、交流する。	○前回捉えた能の特徴にはどんな特徴がありましたか。 ○能は実際どのように表現されているのだろうか。 △総合芸術のオペラとの違いはどこにあるだろう。	*メンチメーターで学習の積み上げを確認する。 *既習の題材との比較を促す。
能《船弁慶》を視聴し、	能のよさやおもしろさをとらえよう。	
2. 能《船弁慶》を部分視聴し、初感をもち、全体で発表する。 ・言っていることがわからない… ・鼓の音とセリフがかぶってよく聞こえない…	○どのようなことを感じますか。一部を視聴し、捉えましょう。 ○どこが難しい、どこがわかれば捉えやすくなりそうですか。	*最初の部分視聴から、実はわからない、わかっている部分が少ない、わからない人が多いことを引き出す。
3. 映像を視聴しながら体験を通して、謡の特徴を捉え、交流することができる。 ・迫ってくる様子を速さで… ・演技が激しくなると、音楽も激しくなっていた ・セリフが少ないぶん歌いの重要性を感じた	○後半部分からどのようなことを感じるでしょうか。解説や字幕がついたものを視聴してみましょう。 ○どのようなことを捉えましたか。	*見つけたことや気づいたことだけに留まらず、その言葉から能のよさや特徴につなげられるようにする。
4. リフレクションをする。	○能のよさやおもしろさはどこにあると思いますか。	

表3 3時間目の授業のメンチメーター・授業の様子・リフレクション

メンチメーター		
力強く、姿振りがはっきりしていて、日本らしい音楽	nohは、ほぼ同じ形のまま700年前から受け継がれた、世界的にも珍しい音楽。観阿弥世阿弥が大成した。舞踊と劇を掛け合わせた物。素晴らしい評価され、ユネスコ無形文化遺産にもなった。	能は大きい声をあげて役を演じるだけかと思っていたのですが、音楽と画の角度にも気をつけながら演じているという伝統舞踊ということがわかりました。
人間の喜怒哀楽を表現して、人外をも演じている古くから愛わらない伝統芸能	背景もない、照明もないというシンプルな環境で、いかにその役に成りきれぬかが勝負。道具は昔から代々使い続け、技術は口で伝えるなど、継承、伝承が大切になる。	力強い声と笛や太鼓などをメインとしたシンプルな音楽
能はお経のようなが、一語一語にちゃんと意味があり、音程の上げ下げが少ない、低い音の音楽である	日本独特の歌い方、歌詞、伝承の仕方など、多方面から伝統的と言える音楽	独特の歌や演技があって面白い。
・日本の伝統芸能・演劇と合わせて発声や歌があり、歌は力強い・音楽で表情を変えて感情を伝える・ほぼ同じ形のまま、700年間伝えられてきた	謡が特徴的(例)声が低くてよく響く、母音(発音)がはっきりしている、力強いなどミュージカルの日本風バージョンユネスコの無形文化遺産に登録されている笛や太鼓などぞ・日本って感じ	600年以上受け継がれている、つまりは600年以上昔の音楽という昔の歴史という日本の伝統文化を濃く表現しているすごい音楽
伝統的な音楽で笛、太鼓を使ってセリフと謡が一緒になっていて、ゆっくりで高揚感が激しくてこぶしがきいている。母音をはっきりと発音していて、よく響く声で謡っている。	こぶしや声が高く、低くて力強い歌だと思った。姿勢を正して腹式呼吸で実際にやるのはとても難しく、長年の練習が必要だと思った。	謡は一定のスピードで一定の低さの重くて響く声を出すこと
・背景がなく照明も変えずに行うので、見ている人は想像しながら見る。→客も、オペラなどは違った楽しみ方ができる・画をかぶるので、1人の役者が色々な役を演じることができる。		能は、昔から日本に存在する伝統的な音楽で数少ない昔のままの音楽です。ミュージカルに似ている部分も多くあり、踊りながら歌も歌う音楽です。
		能にとって「セリフ」という謡が音楽を作る、日本の伝統芸能

<p>授業の様子 1</p> 	<p>授業の様子 2</p> 																																	
<p>リフレクション 1</p> <p>○能の音楽がどのような要素からできているか注目しながら活動することができた</p> <p>131件の回答</p>  <table border="1"> <thead> <tr> <th>評価</th> <th>件数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>1</td> <td>0.8%</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>1</td> <td>0.8%</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>27</td> <td>20.6%</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>102</td> <td>77.9%</td> </tr> </tbody> </table>	評価	件数	割合	1	1	0.8%	2	1	0.8%	3	27	20.6%	4	102	77.9%	<p>リフレクション 2</p> <p>○能の学習に関心をもつことができた</p> <p>131件の回答</p>  <table border="1"> <thead> <tr> <th>評価</th> <th>件数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>1</td> <td>0.8%</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>1</td> <td>0.8%</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>24</td> <td>18.3%</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>105</td> <td>80.2%</td> </tr> </tbody> </table>	評価	件数	割合	1	1	0.8%	2	1	0.8%	3	24	18.3%	4	105	80.2%			
評価	件数	割合																																
1	1	0.8%																																
2	1	0.8%																																
3	27	20.6%																																
4	102	77.9%																																
評価	件数	割合																																
1	1	0.8%																																
2	1	0.8%																																
3	24	18.3%																																
4	105	80.2%																																
<p>リフレクション 3</p> <p>○学習を終えて当てはまるもの全てにチェック</p>  <table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>件数</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①もっと深く知りたい、できるようになりたいという気持ちが高まらなかった</td> <td>6</td> <td>4.6%</td> </tr> <tr> <td>②感動した</td> <td>70</td> <td>53.4%</td> </tr> <tr> <td>③そんなの教科書見れば良かった</td> <td>1</td> <td>0.8%</td> </tr> <tr> <td>④面白くない・退屈だった</td> <td>1</td> <td>0.8%</td> </tr> <tr> <td>⑤やりがいがあるな～</td> <td>59</td> <td>45%</td> </tr> <tr> <td>⑥まちか!思ってたのと違う!って思った</td> <td>42</td> <td>32.1%</td> </tr> <tr> <td>⑦わからない(できない)、わかった(できた)がはっきりした</td> <td>30</td> <td>22.9%</td> </tr> <tr> <td>⑧先生さすがって思った</td> <td>16</td> <td>12.2%</td> </tr> <tr> <td>⑨楽しかった</td> <td>103</td> <td>78.6%</td> </tr> <tr> <td>⑩深くわかることがなかった</td> <td>1</td> <td>0.8%</td> </tr> </tbody> </table>		項目	件数	割合	①もっと深く知りたい、できるようになりたいという気持ちが高まらなかった	6	4.6%	②感動した	70	53.4%	③そんなの教科書見れば良かった	1	0.8%	④面白くない・退屈だった	1	0.8%	⑤やりがいがあるな～	59	45%	⑥まちか!思ってたのと違う!って思った	42	32.1%	⑦わからない(できない)、わかった(できた)がはっきりした	30	22.9%	⑧先生さすがって思った	16	12.2%	⑨楽しかった	103	78.6%	⑩深くわかることがなかった	1	0.8%
項目	件数	割合																																
①もっと深く知りたい、できるようになりたいという気持ちが高まらなかった	6	4.6%																																
②感動した	70	53.4%																																
③そんなの教科書見れば良かった	1	0.8%																																
④面白くない・退屈だった	1	0.8%																																
⑤やりがいがあるな～	59	45%																																
⑥まちか!思ってたのと違う!って思った	42	32.1%																																
⑦わからない(できない)、わかった(できた)がはっきりした	30	22.9%																																
⑧先生さすがって思った	16	12.2%																																
⑨楽しかった	103	78.6%																																
⑩深くわかることがなかった	1	0.8%																																

3時間目の生徒のリフレクション3からは引き続き80%近く「楽しかった」を選択していることから単元の構成、授業1時間1時間を工夫することに気持ちを維持させることができたと考えられる。また、本授業では能「船弁慶」を鑑賞する時間であったが、「感動した」の選択数が53%と約半数の生徒が選択したことが第1時、第2時との大きな違いである。これまで能の外観を捉える学習、そして謡の体験を通した生徒が実際に鑑賞をする学習の経過を経たことで「感動した」と感じ、選択する生徒が増えたのではないかと考えられる。また、上記リフレクション1、2の結果から1時間目では注目できなかった音楽の要素に着目しな

から鑑賞ができたことが認められるとともに、そのことによって学習への関心も高まっていたことがわかる。

4-1 授業を終えた生徒の感想と考察

紙幅の都合により、1時間ごとの授業についての詳細な分析及び考察は行わないが、ここでは3時間の授業後に生徒が記述した感想を取り上げる。言及が目立った四点に関わる内容、①能の演劇的特徴、②謡や発声に関する事、③囃子に関する事、④オペラなどとの違い、に分けて考察を加える。なお、謡・舞など能の複数の要素を組み合わせる特徴を捉えている感想は①に入れた。さらに⑤その他として、字幕、効果音などについて取り上げた。(生徒の感想中の下線は筆者による)

①能の演劇的特徴

- ・能は日本の伝統芸能ということは知っていたのですが、正直あまり面白く無いという印象がありましたが、今までの鑑賞の時間を通して能はただ大きい声をあげて面をつけてやる演技だけではなく音楽や声を活用してその演目にあった演技をするもので、幽霊が出てくる時すり足なかわからないのですが、音を立てずに歩いているのですが威圧感があり怖かったです。
- ・今まで1人ずつ歌うイメージがなぜか自分のなかでは強かったけど、今回は後半亡霊が出てきて以降場面の盛り上げとして何人かで謡うシーンがあって、何人かで謡うこともあることを知りました。場面だったり、心情だったり、その場面の雰囲気に合わせて声が少し変わったり動きも囃子の音楽も変化して、そのようなどころにも魅力があるように感じました。
- ・とても面白かった。実際に能を見ることよっての面白さや工夫などをしっかり見る事ができたと思う。状況に合わせて声の使い方を変えていたり、太鼓のテンポの速さも波の速さに変えていたり、非常に細かなところまで工夫がなされていて素晴らしいなと思ったし、関心がわいた。声の質をも場面やその状況ごとに使い分けていてより話の想像がしやすいなと思った。
- ・能は、役者が発するセリフだけでなく、囃子や謡も楽しめる芸能だと改めて感じた。物語のクライマックスあたりでは、セリフと囃子と謡がそれぞれ100%でぶつかり合っていて、とても賑やかでわかりやすい。背景がないから、その分セリフの一言一言や、囃子と謡の強弱、リズムなど、細かなところまで意識を向けて鑑賞することができると思った。そういう意図で、室町時代からずっと背景がないままなのかな？と思った。
- ・今日の学習で、実際に船弁慶という演目を鑑賞してみて、見る前は能はつまらないものだと思っていたけれども、ストーリー性や周りが盛り上げる感じが面白く、意外と楽しむことが出来ました。
- ・今日の学習で能の長めの部分を見たときに能にはしっかりとストーリー性があるのだということがわかった。セリフが強調されているのではなく、楽器やかけ声、謡が重視されている。
- ・楽器の音の速さや大きさなどの変化が物語の進行に大きく影響していることを実感し、はじめの授業の中で学んだ、能とは踊り+歌+ストーリーで構成されているというのをよく理解することが出来ました。

能のまさに演劇的特徴と言えるものが能の魅力として語られているところに注目したい。例えば、「セリフだけでなく、囃子も謡も楽しめる芸能」「セリフと囃子と謡がそれぞれ100%でぶつかり合って」「セリフの一言一言や、囃子と謡の強弱、リズムなど、細かなところまで意識を向けて鑑賞することができる」「踊り+歌+ストーリー」など、総合舞台芸術としての能のよさを生徒自身の捉え方で表現している。また、「音を立てずに歩いている」「威圧感があり怖かった」というコメントからは登場人物(ここでは平知盛の怨霊)のキャラクターへの理解と想像力がうかがわれる。「その場面の雰囲気に合わせて声が少し変わったり動きも囃子の音楽も変化」「状況に合わせて声の使い方を変えていたり、太鼓のテンポの速さも波の速さに変え

ていたり、非常に細かなところまで工夫がなされていて素晴らしい」などから、後場の荒海での義経、弁慶一行と平家の亡霊たちとの戦いの様子について生き生きと捉え言語化していることがわかる。これまでに生徒たちが体験してきた西洋音楽の表現方法とは全く異なる要素や仕組みが能の中にあることに気づくことを通して、音楽や表現方法の多様性への気づきを導くことにもつながることが期待できるだろう。

②謡や発声に関すること

- ・セリフの数はとても少ないので、謡いの重要性がとても高いことを知りました。
- ・声の質も演じている人たちそれぞれの特徴があって面白いな、と感じました。
- ・謡はただただ単独で歌っているというわけではなくてセリフなどの強調したい部分を繰り返したりして工夫されているなと思った。

能の謡の旋律様式は大きくコトバとフシに大別できる(三浦 1998, p.46)。コトバは音のピッチを認識しにくい台詞のようなもの、フシは旋律的と捉えることのできる音階構造に基づく謡い方によるものと説明できる³⁾。生徒が「セリフの数はとても少ない」「謡いの重要性がとても高い」と述べているところはまさに能の特徴であるといえよう。能においては、謡と舞が演劇的手法の基礎となっており、「舞は声を根となす」(表・加藤 1974, p.86)という世阿弥の言葉にもあるように、「声」がすべての演技に通じる舞の基盤をなしている。「能は、オペラのように歌舞で進行する演劇」(高桑 2015, p.6)であり、歌の集合体によって劇全体が構成され「歌の積み重ねでストーリーが進行する」(同前)という特徴に示されるように、能という歌舞劇の根底を支える重要なものが能の「声」による表現、即ち「謡」なのである。観世流シテ方の八世観世鏡之丞は「能は謡にそって、物語が運ばれていきます」(観世 2000, p.38)と述べている。

「声の質も演じている人たちそれぞれの特徴があって面白い」という気づきにも注目したい。登場人物のキャラクターや性質によって声で演じるわけであるが、演者の個性も声にあらわれる。観世(2000)が「どんだん個性を出して発声してもらおうことで、謡がぐっと面白くなるんです」「一人ひとりの内側の芝居が声になって出てこない、芝居全体としては盛り上がりなくなってしまう」(前掲 pp.39-40)と述べているように、登場人物の内面が演者を通して観客に伝わってくることも能の声の表現について重要な点である。

③囃子に関すること

- ・楽器を使いそのシーンにあったものをやるのでテンポを変え今どのようなシーンなのか耳から入ってくるものでわかりました。

後場の戦いの場面で、文字通り囃子が囃すことに関するコメントである。海がだんだんと荒れてきて、波間から亡霊たちが現れ義経たちに襲いかかる。「テンポ」や囃子の音楽の変化によってシーンが「耳から入ってくる」。それに気づくことは、能という音楽劇の面白さをより深く味わうことにつながるだろう。

④オペラなどとの違い

- ・能はオペラなどと違い、背景も照明も道具もない代わりに、声・歌・演奏・役者の動きを場面によって変化させることによって場面の様子を伝えることがわかりました。特に船弁慶の怨霊が登場するシーンで、歌の声色が低く、演奏に笛が加わったところに怖さ、戦いのシーンで演奏が早くなったところに迫力を感じました。
- ・今日実際に能を見てみて、他の演劇との違いをよく理解することが出来たと思います。例えば、オペラとの違いとして、能は背景や照明などがとてもそっけないですが、その分演者の表現力はとても高いなと思

いました。

- ・能は、西洋の音楽と比べて、楽器が少ないし、それもほとんどが打楽器なので、オペラのように沢山の楽器を使って感情を表現することはできないけど、速度を変えたり笛を鳴らしたりして臨場感を出していたのがすごいと思った。能は西洋の音楽と比べて良くも悪くもすごく単純になっているので、使える物を最大限に活用したり、演じる人と演奏する人の連携がすごく大切である事がわかった。
- ・足で音を立てたり、数珠をこすって鳴らしたり、セットや演奏以外の効果音がなくても成り立っていることを学びました。ミュージカルなどとの違いを改めて具体的に知ることができたと思います。

オペラなどと比較した視点である。「背景も照明も道具もない」「背景や照明などがとてもそっけない」「楽器が少ない」「すごく単純」というような能の特徴があげられている。能の特徴としてよく「非常に簡素」「何も無いところから始まり何も無いところへ戻る」というような説明がされる。舞台装置としての「作り物」も持ち運びできるものであり、オペラやミュージカルのような大掛かりなものはない。しかしながら、「怨霊が登場するシーンで、歌の声色が低く、演奏に笛が加わったところに怖さ、戦いのシーンで演奏が早くなったところに迫力」「その分演者の表現力はとても高い」「速度を変えたり笛を鳴らしたりして臨場感を出していた」「使える物を最大限に活用したり、演じる人と演奏する人の連携がすごく大切」「効果音がなくても成り立っている」と生徒が表現しているように、あえて見せない、聴かせないところから最大限の演劇的效果を生み出す演出方法が、能や他の音楽劇との違いと言うことができるのではないだろうか。能という演劇は、演者と観客との間に目に見えない形で立ち現れるものと言われることもある。例えば、《船弁慶》の後場で、平家一門の亡霊たちが海中から現れる場面で、実際に登場するのは平知盛だけだが、亡霊たちが海面に大勢現れる様子を想像することが重要である。「迫力」「表現力」「臨場感」という言葉で生徒たちが表現したのは、オペラなどとは異なる、能の世界観につながる大切な考え方である。それが「演じる人と演奏する人の連携」によって舞台上に現れる。学習プロセスの中で比較の視点から、能の特徴を捉え語るようになることは重要だと言えよう。

⑤その他

- ・字幕がないと何を言っているか分からないなっていうことは感じた。
- ・内容を理解するには字幕が欲しいなと思った。
- ・足で音を立てたり、数珠をこすって鳴らしたり、セットや演奏以外の効果音がなくても成り立っていることを学びました。(ミュージカルなどとの違いを……)
- ・1時間目と2時間目でやったことが繋がったような気がする。

大学生を対象とした授業でも「字幕があるとわかりやすい」という感想はよく聞く。能の詞章は、現代語とは異なる中世の日本語が中心なので、可能な限り字幕入りの教材を使うことが望ましいだろう。少しでも慣れるために、能鑑賞や謡を謡う活動の前に、謡を音読し内容を解釈したり、古文の口調や七五調に慣れたり、ストーリーをある程度把握したりしておくことより理解しやすいかもしれない。

④でも取り上げたコメントだが、「効果音がなくても成り立っている」ことへの気づきも重要である。舞の中の所作の一つである足拍子や、僧（ここでは弁慶）が数珠をもむ音など、オペラやミュージカルなどの音楽劇における音の環境とは異なる演出が能では一般的である。このような「音」や「無音」に耳を傾けることも能の鑑賞を深めることにつながるだろう。また、「1時間目と2時間目でやったことが繋がった」というのは授業の成果と言える。学習の積み重ねによって理解度や意欲が劇的に向上していることがわかる。

おわりに

本稿で取り上げた能の授業の成果として以下四点をあげる。

- ①楽譜を使わず、鸚鵡返しという能の本来の学習方法を体験することで、聴いて再現する力を高め、模倣と繰り返しによる学習プロセスの重要性に気づく。
- ②これまでに学習したオペラやミュージカルと能との違いについて、根拠を持って比較し説明することができる。
- ③生徒が自ら捉えた能の音楽的特徴や演劇的特徴を語るができる。
- ④生徒が能について「知らない・関心が薄い」ことを自ら認識し、「知る必要がある」に変容していく。

これらのことは、最初に取り上げた第一、第二の点を明らかにすることにつながっていることである。そのことを踏まえて、能の授業づくりについて、ここでは以下の三点の可能性を提示する。

- ①能本来の教授・学習方法、例えば「鸚鵡返し」による謡の実技体験を取り入れ、能に特徴的な声の表現方法と身体の構え方、能における謡の重要性を意識する。
- ②オペラやミュージカルなどとの違いから音楽の多様性に気づくようにするとともに、西洋音楽の理論に基づく音楽劇との相違点、類似点について根拠を持って比較し説明できるようにするために、音楽の要素・楽器編成・発声法・間・舞台空間・演劇的時間・物語など、焦点化して取り上げる。
- ③能について「知らない」ところから出発し、「能って何?」「能の音楽とは?」という問いをさらに深く追究するために、表現したり、意見交流したり、伝えたり、お互いに評価し合ったりする活動を積み重ねる。

今回は3-1で示したStep 1からStep 3に関することについて取り上げた。全4時間の授業のうち本稿で論じた3時間の授業だけを見ても、生徒たちの日本の伝統文化への興味や意識の高まりがみられる。Step 4の授業実践に関することは次稿において論じる。

注

- 1) 中央教育審議会答申において、「我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと」の「更なる充実が求められる」とされたことを踏まえ、次のように改訂した。歌唱や器楽の指導において、我が国の伝統的な歌唱や和楽器を扱う際の配慮事項として、「生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わい、愛着をもつことができるよう工夫すること」を新たに示した(文部科学省 2018b, p.8)。「口唱歌」の用語は、平成29年告示『小学校学習指導要領解説音楽編』にも見られる(文部科学省 2018a, p.129)。
- 2) 「音楽に親しむ態度を養うことは、生涯にわたって音楽に親しみ、音楽文化を継承、発展、創造していこうとするための基本的な力を養うことでもある。」(小学校)(文部科学省 2018a, p.14)「音楽文化に親しむとは、音楽と人々の生活などとの関わりに関心をもち、我が国の音楽に愛着をもったり世界の様々な音楽の多様性を認め大切にしたりすることである。音楽文化に親しめるようにするためには、表現や鑑賞の活動を通して、音楽が人々の暮らし、地域の風土、文化や歴史などの影響を受け、社会の変化や文化の発展とともに生れ、育まれてきたものであることを、生徒が感じ取れるような指導の工夫が求められる。」(中学校)(文部科学省 2018b, p.20)
- 3) 三浦は、謡のリズムと関連づけてコトバとフシについて説明し、「フシは、そのリズムの特徴から、『拍子不合』^{ひょうしあわず}の二つに分類することができる」と述べている(三浦 1998, pp.46-47)。

引用・参考文献

- 生田久美子(2007)『「わざ」から知る』(コレクション認知科学6)東京大学出版会。
- 伊野義弘・相馬直子(2014)「中学校音楽科における日本の伝統音楽の系統的学習一能、長唄、文楽の授業実践例一」『新潟大学教育学部研究紀要』第7号第1号, pp.101-125。
- 岡本泰寛(2018)「高校生の発声指導の多様性についての考察」『明星大学研究紀要—教育学部』第8号, pp.97-102。

- 表章・加藤周一校注（1974）『世阿弥 禅竹』（日本思想大系 第24巻）岩波書店。
- 表章・天野文雄（1987）『岩波講座能・狂言 I 能楽の歴史』岩波書店。
- 垣内幸夫（1987）「能を学ぶ—教員養成大学に於ける日本伝統音楽の授業を探る—」『季刊音楽教育研究』52, 音楽之友社, pp.144-153。
- 観世鏡之丞（2000）『ようこそ能の世界へ—観世鏡之丞能がたり』暮しの手帖社。
- 小島律子編著（2015a）『音楽科授業の理論と実践—生成の原理による授業の展開』あいり出版。
- 小島律子（2015b）『義務教育9年間の和楽器合奏プログラム』黎明書房。
- 佐藤学（2000）『授業を変える 学校が変わる 総合学習からカリキュラムの創造へ』小学館。
- 初等科音楽教育研究会編（2020）『改訂版 最新初等科音楽教育法 2017年告示「小学校学習指導要領」準拠 小学校教員養成課程用』音楽之友社。
- 高桑いづみ（2015）『能・狂言 謡の変遷—世阿弥から現代まで』檜書店。
- 玉村恭・荻野美智江（2017）「授業で能をどう扱うか—中学校での《羽衣》の授業実践から—」『上越教育大学研究紀要』第36巻第2号, pp.643-656。
- 中央教育審議会（2021）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して—全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現—（答申）』https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（2021年3月20日アクセス）
- 長坂麻奈美（2005）「表現と鑑賞を融合した授業における子どもの学びの意欲の育成—中学校での能の授業実践の報告—」『音楽教育実践ジャーナル』vol.3 no.1, 日本音楽教育学会, pp.27-34。
- 中西紗織（2008）「能における『わざ』の習得に関する研究—事例分析からの学習プログラムの開発を通して—」東京藝術大学大学院音楽研究科, 2007年度博士学位論文。
- 中西紗織（2015a）「教員養成課程における能の指導に関する研究—声と身体に焦点をあてた体験学習の意義と可能性」『全国大学音楽教育学会創立30周年記念誌（研究紀要第26号合併号）』pp.93-102。
- 中西紗織（2015b）「教員養成課程における能の学習プログラムの構築—学生の活動とアンケートにおける声と身体に着目して—」『釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要』第47号, pp.97-105。
- 西平直（2009）『世阿弥の稽古哲学』東京大学出版会。
- 尾藤弥生（2008）「教員養成における『謡曲』学習の実践効果に関する考察」『北海道教育大学紀要教育科学編』第59巻第1号, pp.59-73。
- 本多佐保美編著（2020）『日本音楽を学校でどう教えるか』開成出版。
- 三浦裕子（1998）『能・狂言の音楽入門』音楽之友社。
- 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』東洋館出版社。
- 文部科学省（2018）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』教育芸術社。
- 横道万里雄（1987）『岩波講座能・狂言IV 能の構造と技法』岩波書店。

付記：本研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「教員養成過程における日本伝統音楽の授業デザイン」（研究代表者：中西紗織・課題番号：21K02482）の助成を受けたものである。

（中西 紗織 釧路校准教授）

（齊藤 貴文 附属釧路義務教育学校教諭）